

地域の子育て・我がまち育ち
く千田自治会の通学合宿

通学合宿実行委員

美濃部 眞弓さん



木之本町千田で「通学合宿」を始めたのは、平成18年のことです。気づけば今夏10回目を迎えます。

通学合宿とは、小・中学生達が公民館などで寝泊りしながら、炊事や洗濯など身のまわりのことを自分たちで行い学校に通う体験活動です。



▲「ただいま」「おかえり」

自治会総出の通学合宿

千田の通学合宿の特色は、地域住民のみで実施しているところ。市内で行われている通学合宿の多くは、学区単位で外部の学生ボランティアなどの協力を得ていますが、ここでは住民自らが企画・コーディネートし、運営も行っています。千田は100世帯余りですが、通学合宿に参加するボランティアは70人以上、通学合宿を卒業した青年たちも参加してくれて自治会総出の活動です。仕事や家庭が忙しい人は、前の晩におやつを作り届けてくれたり、朝だけ参加して子どもを見送ってくれたり、自分たちのできる範囲でみんながやってくれています。

それでも続けよう

通学合宿を始めて3年が経ち、行政支援も終了し、今後どうするか、岐路に立たされたとき、「続けてほしい」と懇願する子どもたちを見て、大人たちは「続けるべきだ」と思いました。それからは、食事のメニュー等を工夫し経費を削減しました。また、各団体からの協力もあり、健康推進委員は健康料理教室、消防団は火災訓練、老人会は昔話の語りなど、それぞれの団体が活動を兼ねて合宿に参加し盛りあげてくれます。

名札には屋号も記入

通学合宿の日程は2泊から3泊。みんなの名前を覚えるため、どこの家の子ともかわかるように、名札には氏名と屋号を記入し、ボランティアの名前は、写真付で会場に掲示します。ここでは、「口は出しても手は出さない」、「声かけを積極的に行う」、「悪いことをした子がいたらその場で見つけた人が叱る」がルールで、子ども達を見守ります。

自分たちの力で

学校から帰るとみんなで夕飯の買出しと食事作り。お風呂は近所の家で「もらい湯」です。合宿所に戻る



▲みんなで夕飯づくり

ばあちゃんたちと一緒に昔遊びなどをしながら、テレビのない夜を過ごし、宿題を済ませて翌日学校へ行くという集団生活を行います。

子どもが変わった、地域も変わった

活動を始めてから自治会内にも変化が生まれました。活動前は地域の祭りやPTA活動など、狭い範囲で短期間の交流しかなく、隣家の子どもの顔すら知らない人もいました。それが今では、子どもへの注意や声かけがしやすくなり、逆に子どもからも話しかけてくれるようになりました。みんなが共同生活をする中で、子ども同士のつながり、相手を思いやる心、そして自尊心も芽生えてきました。

千田に生まれてよかった

一番うれしかったのは、子ども達が「千田に生まれてよかった」と言ってくれたこと。心底この活動をやってよかったと思えました。もし1人でも通学合宿に参加したくない子がいたら、活動を辞めようと思うぐらいの覚悟で臨んでいます。「地域の子は地域ぐるみで守り育てよう」。みんなの思いが、通学合宿を通じて子ども同士、大人と子ども、大人同士をつなぎ、絆となって根づいたように思います。

園・学校の取組

元気にあいさつ

とらひめ認定こども園

あいさつや返事・履き物の整頓などは大切なことです。園生活の中で、

ひらがな書きにイラストをそえた「子どものちかい」を保育室や廊下に貼り、さりげなく意識できるようにしています。また、園児に呼びかけたり、大人がすすんで手本を示したりして、子ども自らがすすんで取り組めるように工夫しています。

「子どものちかい」の中にもあるあいさつは、人と人とがコミュニケーションをとるうえでもっとも大切なことです。朝の始まりはまずあいさつから…と毎月第3週目は「あいさつ運動」の週とし、近隣の小中学校とも連携して、保護者や民生委員、警察官など地域の皆さんにも参加していただいています。あいさつ運動を継続していくうちに園児はもちろん保護者の皆さんも、笑顔であいさつを交わす場面が増えてきました。



大切にしたい言葉を家族で考える

湯田小学校

豊かな言葉遣いのできる力や心の育成につなげる取組の1つとして行っている「新年親子のメッセージ」では、家族で大切にしたい「言葉」をカードに書き出し1年間の言葉のめあてとします。今年度は「子どものちかい」と「子育て憲章」を参考に言葉を作り、あいさつや笑顔を重んじる言葉、困っている人にかける言葉などが多くできました。「言葉」を教室と家庭に掲示することで、自身で決めたことをいつも意識してもらうようにしています。



自分ができることを、無理なく取り組む

中川 國利さん(今町)

「おはよう」。今町の横断歩道で元気な声が響きます。学校のある日は、ほぼ毎日子どもの登校を見守り続けて7年になる中川さん。

「今までお世話になった地域に何か恩返しがしたいと思ったのが始めたきっかけ。技術も知識も特に持っていなかった自分にとって、続けられそうなのがこれだった」と。中川さんは、朝の見守りのほか、通学路の草刈りやゴミ拾いなども行い、大雪が降ったときは学校まで一緒に歩くことも。

「市内を見渡せば、散歩や花壇の水やりをしながら声をかけたり、皆それぞれに、自分ができる範囲でやっている。こうした人たちの姿を子どもたちが記憶の片隅に残し、大人になったとき、よい循環が生まれたり嬉しい」と、今日も見守ります。



子どもたちを「みんな」で

わたしたちはどの子ども心身ともに健やかに育ってほしいと願っています。「子は親の鏡」、「子どもは模倣の天才」と言われています。子どもたちは大人がすることを真似て、善悪の分別や、知恵、マナーなどを自然と身につけていきます。

『長浜子どものちかい』の5項目、あなたはできていますか。『長浜子育て憲章』一度声に出してみませんか。

子どもを育てることは、未来の長浜を支える人材を育てること。子育て中の家庭だけが、教育や子育てに関わっているわけではありません。子どもたちにとっては、街中でたまにたま出会ったあなたが、教科書の1ページとなるかもしれません。

子どもは、社会の宝。地域ぐるみで子どもたちの健やかな成長を見守り、喜べる街でありたいですね。